

保育現場におけるカウンセリングマインドを生かした養育者支援

森 隆子^{*1}

山本真由美^{*2}

The Fosterer Support with Counseling Mind in the Child Care Fields

Takako MORI

Mayumi YAMAMOTO

Department of Psychology, The University of Tokushima

Abstract

Fosterers who lacked mental stability at the stressful condition increase in the Child care fields. In this paper, it was aimed that discussed relationship between child care and clinical psychology. To this end, the questionnaire was examined to childminders. The contents of the questionnaire were how to understand this condition, how to support to the fosterers, how to support to themselves.

The result of this research was showed that fosterers who can not cope with ordinary supports increased but did not take measures to deal with this situation. Another result was showed that childminders demanded supports of experts in medical and clinical psychology.

It was discussed about the role of counselor with childminders, relationship at child care fields, based on these results.

Key Words ;

Child care fields Fosterer support Childminder support approach of clinical psychology system organizer

^{*1} 徳島市役所子育て支援課 Tokushima City Hall Child Care Support Section Child Care Counselor

^{*2} 徳島大学総合科学部 Faculty of Integrated Arts and Science, The University of Tokushima

I 問題と目的

1. 問題の所在

近年の社会情勢の激変は、子育て環境にも影響を及ぼし、経済状況の悪化により失業する養育者¹や離婚によるひとり親家庭が増加する傾向にある。こうした状況変化の中で、ストレスを抱えこみ、心の安定を欠く子育て中の養育者が散見されるようになった。

とりわけ、育児の始まりである乳幼児期においては、夫婦が協力して育児にあたっている家庭においても、喜びがある一方で、子どもをもち育てることへの不安がある。育児方法に端を発した行き違いから、家族関係に葛藤や軋轢を生みだし深刻な問題へと発展する場合もあり、当然のことながら、子どもたちの成長発達に影響を及ぼしている。

また、養育者が就学までの乳幼児を保育施設に託す場合、「わが子がいじめられている」「先生の対応が悪い」などの悩みや不満をもち、その原因を園側に求めるいわゆる保護者クレームの存在も園側の負担を大きくしている。

こうした諸状況の中で、保育関係機関への多様化する要望と過大な期待は高まる一方であるが、状況の展開がみられない場合は、養育者・園側双方に意思の疎通を欠く事態となる。争いを避けるために、園側が養育者の言いなりになったり親の個人的な問題であるとして目をつむることは、根本的な問題解決には至らず、対応に苦慮する保育者²の中には、養育者の感情を受け止めきれずに精神的に不安定になる者も出ている。

このように、保育現場において養育者との信頼関係が築けないという問題が与える影響は大きい。親と子の相互関係には緊密なものがあり、養育者の問題は子どもの問題となりうるからである。すなわち、養育者の心の問題を取り除かない限り、乳幼児の健やかな発達は望めないといえよう。

しかしながら、従来の保育界においては、乳幼児の発達過程等に取り組んだ研究は盛んであるものの、養育者の心の問題を正面から取り上げることは少なかった。乳幼児の発達上の諸症状は、目の前に見られる子ども自身の問題とされることが多く、その奥にある養育者の躓きが影響しているという点についてはあまり語られてこなかった。つまり、母親および父親の心理的不安が高まることによって引き起こされる諸症状も、子ども側に原因があるものとして扱われることが多かったのである。さまざまな養育者がいるのは当然としても、子育ての基盤が揺らぎつつある養育者に対しては、温かいまなざしで支援の手を差し伸べる必要があるとされよう。

以上のことを踏まえ、本研究では、養育者の心の問題に視点をあて、保育現場への臨床心理学的アプローチの可能性について論究する。

2. 本研究の目的

保育現場における臨床心理学的アプローチの実態と今後の方向性を探るため、質問紙法により、T県下保育界の実態調査を実施する。

まず、T県下の保育所や幼稚園において特別な支援を必要とする乳幼児や育児不安を抱

¹ 本論文中、「養育者」とは、子どもの親およびそれに準ずる保護者を指す

² 「保育者」とは、保育所・幼稚園における保育士や幼稚園教員を指す

える養育者の実態を把握する。とくに、保育所や幼稚園で保育者が対応することに難しさを感じる子どもや養育者の増加状況を調査するとともに、それらが起因する背景を探る。

次に、各園所が取っている問題解決への対策の有無や望ましいと考える支援事業について自由記述で回答を求め、検討する。ここでは、カウンセリング的支援等のニーズについても取りあげ、相談システムの一環として、各園所が希望する職種を調査することにより、保育現場における臨床心理学的活動の今後の課題を探ることとする。

II 方法

1. 調査対象者

T県下保育界の園・所長に質問紙調査を実施した。

2. 期間と方法

2004年11月～12月に郵送法で実施した。

3. 調査項目

巻末に添付

4. 回収率

37.5%（保育所39%・幼稚園35.6%） 郵送先；403カ所（保育所223・幼稚園180）

回収；151カ所（公立保育所54・私立保育園33・公立幼稚園58・私立幼稚園6）

集計結果の送付を希望した園所（39カ所）

III 結果と考察

1. 対応の難しい子どもや養育者の実態

図1のとおり、保育者が対応に難しさを感じる子どもや養育者の状況は「やや増加・かなり増加」傾向になっており、両者を併せると83%と高率となった。難しい養育者との対応に苦慮している保育界の現状がうかがわれる。

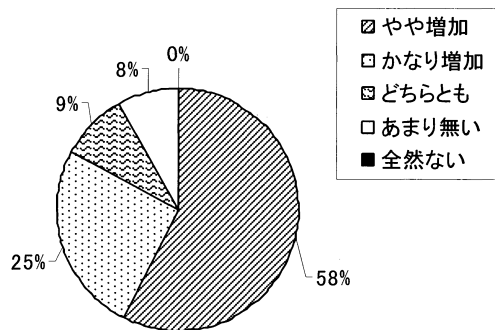


図1 対応の難しい子どもや養育者の増加

2. 問題解消のための対策事業の有無

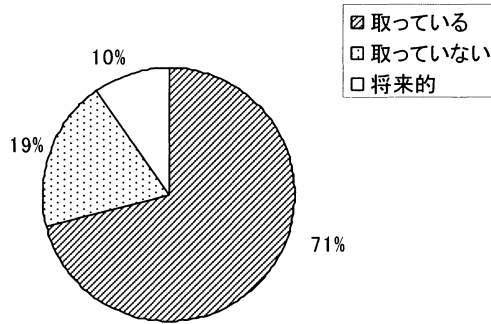


図2 問題解消のための対策を取っているか

図2は各園所が取っている問題解消のための対策についての調査結果である。「対策を取っている」と回答した率は71%であるのに対して「取っていない」と答えたのは19%であった。「難しい親が増加傾向にある」と回答しながらも「対策の必要性はない」と答えている園所も見られ、増加傾向にある実態と対策へのギャップが見られた。

このことは対策を模索中とも受け止められるが、具体的な方策が見当たらないという保育現場の実態を示している結果とも考えられる。

3. 問題解消のための対策事業内容

図3は、問題解消のためにどのような対策事業をしているかを複数回答で求めたものである。不定期に相談を受け入れていると回答した各園所は99カ所あり、各園所において発生する養育者の悩み相談やクレームに対して迅速に対応している状況を表しているものと

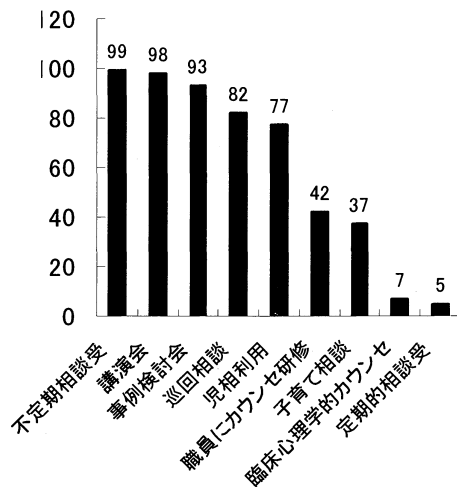


図3 実施対策事業(複数回答実数)

考えられる。これらの結果から、T県下における保育界で実施されている事業は養育者対象の子育て講演会などが主流を占めているといえよう。

4. 具体的な対策事業（記述回答）

表1に具体的な対策事業について得た記述回答143件を分類したものをまとめた。

まず、職員を対象にしたものと養育者を対象にしたものを検討したところ、職員を対象にした実施事業では、ケースカンファレンスに続いて、臨床心理士等専門家講師による研修やカウンセリング技術についての所内研修が挙げられた。一方、養育者を対象としたものでは、お互いの信頼関係を築くことが第一であるとして、さまざまな事業が実施されて

表1 実施している対策事業分類

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	件数
職員研修	園内研修	事例検討・ケースカンファレンスをする	14
		臨床心理士等専門家講師による研修	11
		カウンセリング技術についての所内研修	7
		巡回指導講師の研修	4
	園外研修	人権教育研修参加	1
		県私幼連の検討研修会参加	1
特別支援教育事業・障害児保育	小学校・保育所との連携	小学校との連携を密にしている	4
		保育所との交流	1
	専門機関との連携	児童相談所との連携（養育者同伴含む）	13
		保健師との連携	7
		きりん・ねむの木・ことばの教室等と連携	7
		巡回相談員と養育者との話し合い	2
		外部より講師（臨床心理士・歯科医）要請	1
養育者対応	講演会	子育て講演会	15
		未就園児保護者へ講演会	2
	個別の対話	個人懇談等で養育者との話し合いが大切	19
		入園前の説明会に保育参観	5
		家庭訪問	2
		子育て懇談会（母親どうしの話し合い）	1
	外部から子育て相談	専門機関・巡回指導員との話し合い	5
		県教委の巡回相談	4
		虐待の事情把握を含む保健師相談	3
		市教育委員会・教育研究所の子育て相談	3
	その他	延長保育・一時保育・ともだち広場事業	6
		苦情解決事業の周知・意見箱設置・評議員会	4
		クラス便りに悩み等の記入欄を設ける	1
合計			143

いた。子育て講演会の実施件数が多くなっているが、「本当に聴いてほしい養育者は参加しない」など、各園・所長の本音とみられる発言もあり、今後、養育者が魅力とを感じる啓発スタイルへの追求が必要であろう。

信頼関係を築くためには、一般的な講演会より個人懇談等で個別に養育者と話し合うことが大切であるという回答が19件あり、今後の方向性が示唆される。「母親どうしの話合い」実施という回答は1件であるが、グループカウンセリングの一環として有効性があると思われる。

特別支援教育（障害児保育）については、回答件数が増加したが、これは本調査実施時期が法改正時期と一致したため、保育現場での関心が高まったものと考えられる。

5. カウンセリング的な事業の対象者

図4は、カウンセリング的な事業を実施する際の対象者について調査したものである。主に保育者を対象にする場合が36%、次いで乳幼児と養育者を併せて対象にする場合が34%となり、養育者のみを対象としている園所は3%となった。

ここで、カウンセリング的な事業の対象者として、「乳幼児と養育者」を併せて対象とする場合と「養育者のみ」を対象とする場合の違いについて考えてみたい。本研究の「問題の所在」でも提示したとおり、前者では、主に乳幼児を保育する上でその発達上の諸症状を問題点として捉えることが多い。問題は乳幼児であって、養育者ではない。しかし、後者では養育者の心の問題そのものを取りあげるという点で、根本的な違いがあると考えられよう。

図1に示したとおり、保育現場は、対応の難しい養育者の増加を実感しているが、各園所が実施している「養育者のみ」のカウンセリングを挙げたのは全体で3%となったことは、実際には十分な対策が機能していないという点で問題を深めていると考えられる。

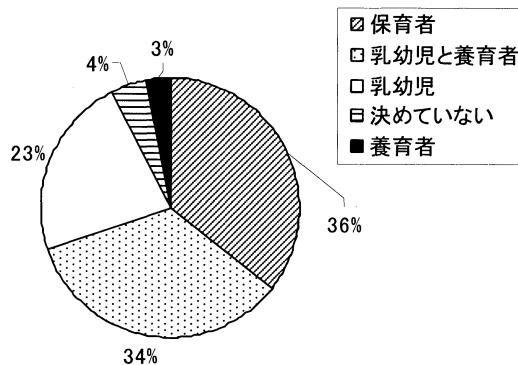


図4 カウンセリング実施の対象者

6. 相談システムの一環として園（所）に来てほしい人の職種について

図5のように、各園所が希望する支援者の職種を調査したところ、「臨床心理士」の支援を望むという回答が34%となり、次いで「小児科医・精神科医」を望む率が25%となった。このことは保育現場が希望する支援者として、心理面での専門職を要望していること

だと受け止められる。

こうした専門家に対して、後に表2に挙げられたように、「必要なときにすぐに来所(園)してくれることが理想的」であると述べられている。これらは、日々の保育状況のなかで、待たなしに起こることへの対応であり、保育者としての子育て支援だけでは限界を感じる時に専門家への支援を望んでいると受け止められる。また、今までは対応して来られたものが、社会的変化や子育て環境の変化を受けてのものとも考えられる。

次いで、希望する職種として挙げられたのは「園長や退職者」であり、「大学や小・中学校教員」を望む声は低くなった。このことは、保育現場をよく知る者を求めているということであろう。

図6の回答にも寄せられたように、保育現場は多くの複雑な問題性を同時に抱えており、現場の難しさと特殊性に対応するため、支援者として求めているのは、現場の事情を改めていると説明するより「わかってくれる・了解してくれる」者であり、心理面の専門家であるといえよう。

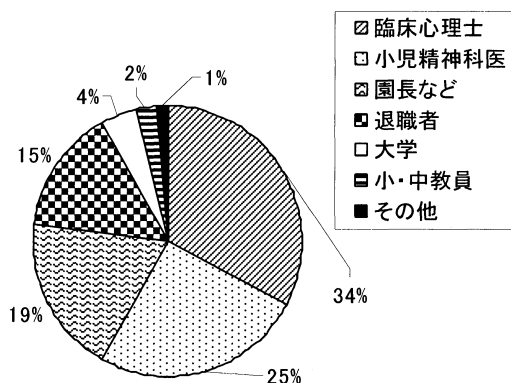


図5 頼みたい職種

7. 「保育カウンセラー(仮称)導入」の背景として考えられること

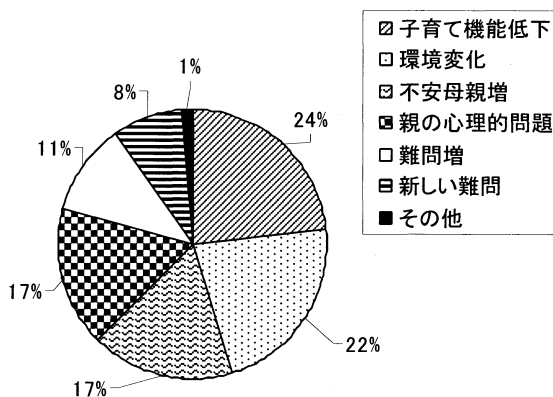


図6 保育カウンセラー導入の背景

図6は、子育てへの悩みを抱えた養育者や教諭、保育士へのカウンセリング的な支援をする制度として、「保育カウンセラー（仮称）の導入」が検討されているが、その背景として考えられることへの複数回答を求めたものである。「子育て機能の低下 24%」、「環境の変化 22%」、「母親の子育て不安 17%」、「親の心理的問題の存在 17%」と、いずれも拮抗しており、社会的な問題を多く含んでいる。回答率がとくに偏らなかったということは、多少の差をつけられないという結果でもあり、こうした問題に対処していくために、今までの保育上の知識や技能だけでは十分でないと感じている表れと考えられる。

8. カウンセリング的な支援の必要度

図7は、カウンセリング的な支援の必要度を見たものである。「かなり必要」が52%、「やや必要」が42%となった。両者を合わせると94%となり、各園所ともにカウンセリング的支援を望む比率が高くなっている。

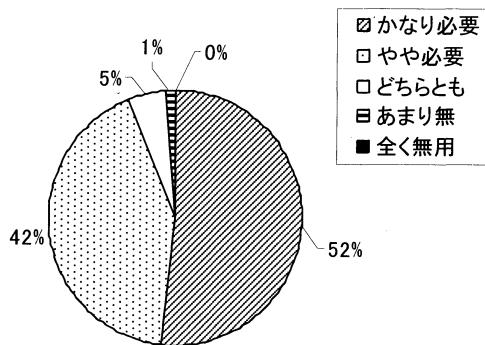


図7 カウンセリング的支援の必要度

9. どういうときにカウンセリング的支援の必要性を感じるか

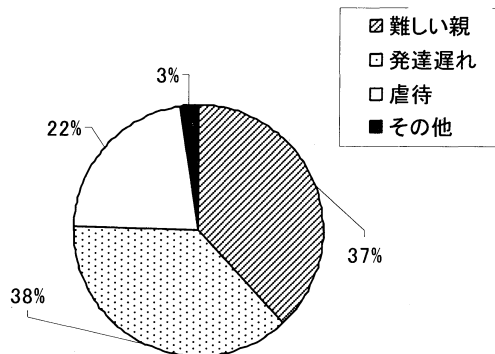


図8 カウンセリング的支援の必要性を感じるのはどんな時？

図8のとおり、対応の難しい保護者自身の悩みに付き合うときが37%、特別な支援が必

要な乳幼児に対応するときに38%となり、両者を併せると全体の $\frac{2}{3}$ となった。

10. 保育カウンセラー（仮称）の存在の認知

図9では、保育カウンセラーの存在を知っていると答えた者が85%、知らない者が15%となった。「保育カウンセラー」という呼称については現時点（2008）でも、日本臨床心理学会・日本保育学会共に確定的ではないが、保育界ではカウンセリングをテーマとする研修はよく実施されておりT県下における保育界でもよく認知されているといえよう。

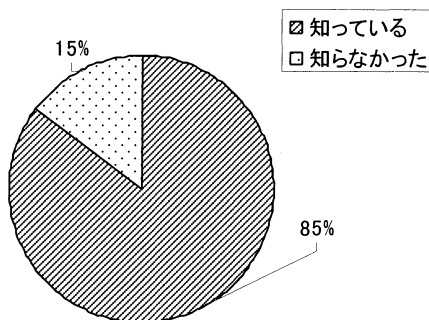


図9 保育カウンセラーを知っているか

11. 今後、実施してほしい支援（記述回答）

保育現場が望ましいと考える支援について得られた48件の記述回答を分類すると、表2のような結果となった。各項目を「養育者に関する支援」「保育者に関する支援」「臨床心理学的支援」に分類した。

まず、「養育者に関する支援」では、①子育てで不安の解消のための支援 ②子育ての技術支援 ③サービスシステムに分類することができる。

①については、子育てに楽しさが感じられない養育者には、子育てで不安があるということでもある。その不安解消のためにさまざまな方法が挙げられているが、現状では、特にこれといった決め手は見られなかった。行事や保育参観の機会を捉えて子育てが楽しいと感じられるような支援、単親家庭を含め子育てに不安をもつ母親へのサポート、子育てに必死の母親が多いので、肩の力を抜くためにも子育てから離れることができる時間の提供などを挙げていた。また、ニュース等で虐待やいじめについて報道がされると、わが子へのいじめを心配する養育者への細やかな配慮や、養育者との信頼関係を築いていくために、カウンセリングマインドで対応することが重要であると感じていた。

②については、少子化で子育てへの知識や技能が十分とはいえない養育者への子育て支援が語られていた。③のサービスシステムは一般的とも言えるが、既成概念の枠を外して何らかの援助ができないかと探るものであった。

難しい養育者対応への意見が8件示されたが、総じて否定的なものが挙げられ、難しい養育者への指導的な意見が多かった。例えば、①ケースバイケースだが保護者の多様な価値観にも問題がある ②核家族化で母親の意のままに育てられた子どもが将来反抗するの

表2 今後、実施してほしい支援事業分類

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	件数	
養育者への支援に関すること	子育て不安の解消のための支援	子育てが楽しいと感じられるような支援	4	
		単親家庭を含め不安をもつ母親へのサポート	3	
		子育てから離れられる時間を月に1度でも	1	
	子育ての技術支援	子育ての技術支援	子育て・親育ち支援 保護者の子育て研修会	2
			気になる子への細やかな支援・全年齢に連絡帳	2
			家庭支援推進保育士の充実	1
			経済的に困難な方への対応や育児放棄について	1
	サービスシステム	サービスシステム	難しい養育者対応への意見	8
			預かり保育	2
			病児保育システム	1
保育者への支援に関すること	保育者研修(自己研修を含む) 保育者対象	保育士資質向上	3	
		保育者に対するカウンセリング	3	
		子ども一人ひとりに向き合い、スキンシップ等を重ねることで養育者と信頼関係を築く	2	
		自己満足で終わらないように時代の流れにも傾いていかねばと思う	2	
		職員指導の難しさ痛感、自己の資質向上	1	
臨床心理学的支援に関すること	保育者・養育者対象	親支援のために保育士のカウンセリング的能力をつけるための研修が必要(家庭との連携の中で親の悩みや思いを受けとめられる保育士の養成)	5	
		保育士としての立場上、親対応に限界を感じる時に専門的立場の人に援助して貰いたい	2	
		精神科医・臨床心理士等専門的立場で現場と一緒にあってアドバイスしてくれる機関	2	
		子育て方法、心の教育など専門的な話を聞かせたい。今後子育てカウンセラーは必要	2	
		心理的・物理的等いろいろな方面から支えてくれる人材派遣センターや物資貸し出しセンター	1	
		合計	48	

は、がまんしない若い母親のつけとも思われる ③働く母が増え、子どもの心のケアができていのかどうか心配 ④保育所に預けたら基本的な生活習慣を身につけてくれるというのが、家庭の役目ができていない現状がある ⑤親の都合で生活リズムの確立ができない ⑥親の気に入らないとすぐに訴えられたり問題にされたり、せいぜい懇談会でお茶を濁す程度かできないのではないかなどの意見は、保育現場が抱える問題を含んでいる。

このような養育者批判とも受け止められる親への思いへの記述は保育所で多く、保育所(園)では、乳児期からの入所(園)が増え、今までならば家庭で行われていたしつけを、

保育のなかでどのように引き受けていけばよいのかなどの悩みが語られた。保育所での養育者支援は日々の生活に密着したものであることから、養育者指導という形で、子どものしつけや生活態度にも言及することが多いということであろう。しかし、そうした保育者側の指導的・批判的な姿勢は、カウンセリングマインドで養育者を受容するという姿勢からは遠ざかるものであるといえよう。

保育現場では、「難しい親」の増加を実感し、早急の対策を望んでいる姿が浮き彫りにされた。養育者支援が必要なことは十分承知しながら、園（所）長など現場を管理する者としての苦しみのようなものが伝わってくる。

次に「保育者に関する支援」には「臨床心理学的支援」と重なるものが見られた。保育者へのカウンセリング技術は、養育者支援の過程で必要と認識されており、そのための資質向上としての研修が望まれている。「否定的ではなく保護者の話をじっくり聴く」と記述された意見では、保育者の資質向上としての意見でもあり、臨床心理学的支援として養育者に貢献するものでもある。

最後に「臨床心理学的支援」として、「養育者への子育て方法、心の教育などを専門的な立場から話を聞かせてあげたい」「今後、子育てカウンセラーは必要である、ぜひ良い方向に進めてほしい」などの記述が見られた。

また、「保育や養育を心理的・物質的等いろいろな方面から支えてくれる人材派遣センターや物資貸し出しセンターのような施設が身近なところであれば良いなと思う」などの貴重な提言も見られた。そして、「専門的立場で現場と一緒にあってアドバイスしてくれる機関といつでも連絡が取り合えるようであれば心強い」と望んでいた。

IV 総合考察

1. 保育現場における試行的実践

本調査によるT県下保育界における実態調査と筆者の保育現場での試行的実践から得た臨床心理学的アプローチには、次のようなことが考えられる。

一つは、心の悩みをもつ養育者に対する心理療法が挙げられる。養育者のなかには、子どもに対する接し方がわからないという育児不安を抱える人や夫婦関係、家族関係のなかでそのありようについて悩んでいる人がいる。そのような養育者に対して、園内で面接室を設けるなどしてのカウンセリング実施や、外部から心理臨床の専門家を招いて、定期・不定期的なカウンセリングを実施する方法がある。その結果、養育者の心の悩みが取り除かれ、育児不安が軽減されることで、養育態度に変化が見られ、子どもの問題行動や不適応が解消されたという事例が挙げられる。

二つ目は、保育者への臨床心理学的アプローチである。個人的な悩みを抱えた保育者にカウンセリング等で心の安定を図ることで、子どもや養育者との関係、職場内での人的関係がスムーズに運ぶことがある。また、子どもや養育者との対応に困難さを覚え、自信をなくしている保育者も増えており、その対策として、園内でのカウンセリングや外部の心理療法の場を紹介する方法が考えられる。

加えて、軽度・重度にかかわらずさまざまな障害をもつ子どもや気になる子どもに対して、保育の場への遊戯療法や心理療法等治療的介入の可能性を検討したい。いずれも、園

内に専用の面接室やプレイルームを設けるなど発達診断等を行える場があれば理想的である。

また、臨床心理士等による保育者へのコンサルテーションの有効性も考えられる。従来、コンサルテーションは、学校における教師のような専門職に対する心理の専門家の支援活動として言われてきたが、そうした活動を保育現場にも生かしていくことで、より適切な保育活動が展開されるものと思われる。カウンセリングマインドを生かした保育実践への示唆など、保育者への臨床心理学的なアドバイスは今後、必要な課題と考えられる。

それらの一例として、まだ少数ではあるが、園全体の心理臨床の事業の取り組みが挙げられる。たとえば、「子育て喫茶室」の名称で養育者間のグループカウンセリングの場を設け、子育て相談に臨床心理学の知を活かしている保育所や、園長が臨床心理士である幼稚園において、箱庭療法を取り入れた例、外部から保育カウンセラーとして臨床心理士を導入している幼稚園等の実践がみられる。

しかし、これらは実態調査からも明らかなどおり、一般的といえるほどには広がっておらず試行錯誤の段階であるといえる。園内に適切な人的配置が得られない場合に、どのような立場の人が、どのような形でカウンセリングなり心理療法を行うかということは確定していない。実際に子どもがそこで生活し保育されている園内で、養育者の話を聴く場合のメリットとデメリットとについて検討していく必要があり、今後、臨床心理学的にどのようなアプローチが行えるのか多くの課題が見出される。

2. 保育の源流にみる臨床心理学的視点

保育学には臨床心理学にも通じる視点が多くみられる。ここでは、保育界の指導者であった倉橋惣三と平井信義の保育観について考えてみたい。

倉橋(1936)の保育観の一つに「共感性」重視が挙げられる。「子どもの心もちは、極めてかすかに、極めて短い」ので「かすかにして短き心もちを見落とさない人だけが、子どもと俱にいる人である」と述べる倉橋は、子どもの気持ちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる保育者が望ましいと述べる。このことは、セラピストがクライアントと向きあうときに、心理学の技法や知識でもって向かうというより、まずはクライアントの心情に耳を傾けよという教えに通ずる。すなわち、セラピストにクライアントの心の動きや揺れを傾聴するという出発点があつてこそ、次のステップへすすめるということを示唆するものである。

このように倉橋の保育観は、心理臨床に共通するものを多くもっている。倉橋のいう保育者の姿は、カウンセリング場面においてクライアントの前に立つセラピストが心しなければならぬ姿勢の一つでもある。津守(1979)は、倉橋の『きげんのよしあし』という論考(倉橋, 1911)をとりあげ、保育者が子どもの前に立つ時の心構えについて「子どもの前に出たら、教師は自分の感情を抑えて、子どもを受容するよに」ということを述べたものであるが、それだけいわれても、それは本当のことではあるが、私どもではそうすることができない。ここにいわれているように、まず、教師の心の中にあるさまざまな感情や悩みが受容されて、はじめて客観的にみることができるようになる現代のカウンセリングの理論がこのままに表現されているのを見る」と述べている。

一方、平井の保育観と心理療法の関連性は深く、「受容」と「共感性」の重要性につい

て述べ、カウンセリングの精神をカール・ロジャーズに学んだことが、平井自身の人生においても非常に役立ったと語っている。「子どもの問題行動について相談に来たお母さんやお父さんに対して、よく話を聞き（傾聴）、そして気持ちをくむこと（共感）の必要性を教えられた」と、親の方に提案をすることはあっても、決して命令ではなく提案を受け入れるかどうかを、親自身に「まかせる」ことの重要性について語っている。

また、平井は「子どもから学ぶという言葉が言われてきたように、親から学ぶ」という謙虚な気持ちが必要であると述べ、いろいろな養育者の考え方を謙虚に受け入れることによって、養育者たちと親しみ合う関係が作られるという姿勢をとる。

このことは、拙論実態調査にも見られたように、保育現場を管理することに重点をおくあまりに、養育者の言葉や態度を「保護者クレーマー」と決めつけてしまうことは、養育者を受容する立場からは遠く、わかりあえることへの門を閉ざしてしまうことの危険性を示唆される。

3. 「保育臨床」という新たな視点

大場幸夫(1989)は、「子どもの生きる場として保育の場を見るとき、従来以上に強調したい点は、『臨床のフィールド』という捉え方である」と述べ、「保育臨床 (clinical approach for child care)」という用語を初めて使用した。後に大場(2007)は、「保育臨床という概念は、保育実践を理解する視点の一つ」とし、「保育臨床という用語によって、子どもとともに生きるという保育者自身のあり方(専門性)そのものが、優れて臨床的であることを示唆される」と述べている。

しかし、保育者たちは子どもに発現する諸問題に日々、適切な対応を求められており、近年は、いわゆる「気になる子ども」の増加傾向に加えて、「気になる養育者」の存在も見落とせない状況となっている。本調査でも、T県下における保育者たちは、心理の専門家の支援を求めている。

このように、保育現場が第三者からの示唆・助言を求めるニーズは要求の度を増しているが、大場は「保育の場で他の専門機関との連携が必要であるとしても、それが近接領域の専門職への依存に終わることなく、保育者自身の専門性には「臨床性」があるということを見出すべきだ」と促している。これは、大場が保育の現場で巡回療育相談や保育事例研究の場に立ち会うなかから実感したことであるという。そしてなお、多くの地域において、「保育者と近接領域の専門家との意味あるコンタクトが絶望的なほどに困難である」とも述べている。

一方で、心理臨床の専門家やソーシャルワーカーが、自ら保育現場に学び、子どもの園生活を理解しようとする姿勢が重要であると指摘する。そして、「関連する専門職同士が問題への対応に必要な情報交換や、専門職間の地域規模の相互扶助のために、援助あるいは協働の体制『保育ネットワーク』の構築が必要である」と提言している。

このことは、前提の平井の論考を一步進めたものといえる。近い将来において「保育カウンセラー」のような職種が一般的なものになったとしても、保育現場において、保育者とカウンセラーが協力しあって、養育者等を支えていくことが重要である。大場は、保育の場自体の「臨床性」に着目し「保育臨床」という新たな視点を提示することで、「子どもが生きる現場として保育を見つめ、そこに発生する諸問題を保育者とともに考えていく

心理臨床家」の必要性を看破したといえよう。

V 今後の課題

1. コミュニティ心理学の知見に学んで地域社会へ発信する

保育現場における臨床心理学的な面接構造は、流動的であり不確定な面が多く、保育者として筆者が保育者として実践したなかでも構造化されたカウンセリングの形は取れなかった。その理由として、これはスクールカウンセリングについてもいえるが、カウンセリングなどの臨床心理学的アプローチが、保育現場という日常空間で日々、行われている点が挙げられる。保育現場では、面接構造を守っての心理療法なども時には必要だが実際には難しい。

これは、子育て中の養育者が地域社会のなかで生活しているためである。このことをきちんと受けとめ、今後は保育現場内にとどまらず、地域社会への発信が重要となってくるであろう。また、保育現場では地域社会からの情報を受け止めるだけの力の蓄積が必要である。つまり、保育現場を地域社会の一員とする位置づけである。そこでは、養育者への社会福祉の支援が必要とされる場合もあり、民生委員との伝えあいや精神科クリニックへの同伴などソーシャルワーカー的機能の必要性が生まれており、コミュニティ心理学の知見から学ぶことが多い。

金沢 (2004) は、コミュニティ心理学の基本を「伝統的な臨床心理学からの発想の転換」であると述べ、「人は環境のなかでさまざまな役割を担い、環境内の他の人的・社会的・物的側面と接しながら生きている。この観点に立つと、普段の生活環境から切り離された面接室の中で1週間に50分間クライアントを相手にするよりも、クライアントの普段の生活環境に目を向けることが有益なのではないか」と述べる。これまでの筆者の実践のなかでも、保育現場で関わる養育者たちはいわゆる個人心理臨床の枠には入らず、日々の生活のなかから本人たちの自由意思で筆者と関わってきた。

また、予防的対策という点から見ると、養育者の心の問題が生じてからの対処ではなく、そうならないようにすることは可能である。保育現場という性質上、欠かせない朝夕の送迎時の関わりをポジティブにとらえると、短時間であってもこれを有効に生かすことができる。カウンセリングマインドで対応することで養育者との信頼関係を築き、そのストレスを緩和するような予防策が得られる。それは、金沢のいう地域の中のコーディネーターやオルガナイザーとして「表に出るよりも黒子的な存在として、間接的な援助を行う」ことに他ならない。

コミュニティ心理学の基本的な考え方として、クライアントと接する際に「クライアントの問題を探り出すことにエネルギーを費やすよりも、そのクライアントのもつ特質を探り、クライアントにできることは何か、それを伸ばし生かして行くにはクライアント本人とその周囲をどのように変えていけばよいかを考える」(金沢, 2004) ことが重要である。そういう意味では、保育現場という限定された場で養育者の諸問題と向きあうとき、養育者たちの語られない言葉を無理に語らせようとはせず、子育て支援という立場で、情報提供をするなどカウンセリングマインドで傾聴することは可能である。これらを大きな意味でコミュニティ心理学の知見を生かしたものと捉えたい。

コミュニティ心理学の「福祉領域」をみると、「子育て支援」もその一分野として考えられている。日本臨床心理士会は、子育て支援専門委員会(2000年10月に第1回研修会開催)を立ち上げ、子育て支援に関わってきた臨床心理士による実践報告をした。その活動の場として「保育所、児童館、幼稚園、学校、保健所、地域の集まりなどに臨床心理士が出向いていく形でなされる心理相談、アセスメント、研修、コンサルテーションなどがある」と述べ、山本(1986)が挙げるコミュニティ心理学者の役割の変革の促進者、コンサルタント、評価者、システム・オルガナイザー、参加的理論構成者のうちのシステム・オルガナイザーであり、今までにない新たな「サービスを作っていくシステム・オルガナイザーの機能」(三島, 2004)が求められると述べている。

ここでいわれるシステム・オルガナイザー(system organizer)の仕事とは、既存の公的サービス諸機関の関係を調整し、ユーザーのニーズに合う受け皿をつくること、あるいはもし、こうした公的なシステムがなければ、新しい支援組織を作ることである。

システム・オルガナイザーは、自分が先頭に立つよりも、側面から援助することが重要となる。コンサルタントも、システム・オルガナイザーも基本的には黒子的役割と考えられている。その意味でいえば、筆者が行った保育現場での迷いながらの実践も、今までの保育実践の中にはなかった行動であり、新たに作っていくシステム・オルガナイザーの機能であったといえよう。

三島は、「これからの子育て支援の課題は、単に母親の子育て機能の支援にとどまらない」と述べているが、それは、保育現場での養育者たちにもいえることであり、必然的に、支援は本人だけでなく家族全体におよんでいく。ひとり親家庭への支援は当然のことながら、両親が揃っていても、夫の長時間労働により、ひとり親家庭と同様の状況が作られていることなどにも目を向けていかねばならないであろう。こうしてみると、これからの時代は、保育現場における課題は山積しているといえる。

2. 保育学と臨床心理学の融合をめざして

倉橋や平井の論考にもみられるように、保育学の源流には「共感性」や「受容」を重視する保育観があり、そうした保育現場を大場は、「臨床のフィールド」と捉えている。これらは、臨床心理学が大切にしてきたカウンセリングマインドで傾聴する姿勢にもつながり、保育現場には心理臨床場面に共通するものが多い。

間藤(2001)は、「集団を対象とする保育者と、主として問題をもつ個人を対象とするカウンセラーとは異なっている。しかし、保育が発達を援助し人格形成を目標とするものであれば、心理療法の場と共通するものをもっている。(中略)方法や対象は違うが、保育者とカウンセラーの姿勢にも同じものをいくらかでも発見することができる」と述べている。

筆者は保育者として40年間を過ごした。現在は、市役所子育て支援課に席を置き、初歩的ながらコミュニティにおける子育て支援の分野で、臨床心理士としての実践を行っている。新しく臨床心理士としての立場が加えられた今、保育者と臨床心理士双方のアイデンティティ確立をめざしているところである。筆者に与えられた保育現場と臨床心理学的視点をつなぐ者としての立場から、今後、保育現場においてはどのような臨床心理学的支援が有効なのか、T県下の保育界の実態調査から考えてみたい。

これまでの保育現場においては、保育者自身が乳幼児や養育者に対して、共感性と受容

の保育観で接してきた。その後、カウンセリングマインドで対応することの重要性が示唆され、研修の形となっていった。多くの保育者が知識としてカウンセリングマインドの姿勢をもつようになり、保育者自身がカウンセリングマインドで乳幼児や養育者に対応するようになったという経過がある。

しかし、本調査でも明らかとなったように、近年では保育現場が専門家の支援を求める声は大きくなっている。これは、社会情勢の変動や子育て環境の変化も一因として考えられるが、保育者によるカウンセリングマインドの技量や集団保育の領域を超えたところに問題性の発生が見られるようになったからであろう。たとえば、対応の難しい養育者や「発達障害」が疑われるいわゆる「気になる子」の存在である。これらの問題性は、集団保育の中で対応していくことでは解決されないことが多く、集団で接することでより問題を深めてしまうことさえある。

そこで求められているのが、本調査の表1及び表2の記述回答にもあるように、臨床心理士等の専門家による支援である。保育現場では、多くの乳幼児を抱え日々、一瞬一瞬の変化が見られる。保育士たちの日常は緊張の連続であると言っても過言でないだろう。こうした現状は、保育者自身へのカウンセリングが求められていることから明らかである。

このような現状に加えて、先に述べたような問題が増加し、集団対応に限界を感じる保育現場では、一對一の個別で向き合い傾聴できる臨床心理士等配置のシステムが求められるようになったと考えられる。保育現場においては、図らずも平井が見越していたように、保育者自身がカウンセリングの技術を身につけるより、カウンセリングの専門家に応援を頼む方が有効であろうという展望は、現時点でのT県下での実態調査からも明らかとなったところである。

しかしながら、大場も憂慮するように、保育界では「近接領域専門機関との連携は一方的な依存となっており、且つその実現も危うい」という現状がある。今後は、保育者自身の専門性に大場が述べる「保育臨床」の知見を加えながら、臨床心理学と保育学の融合を図っていく必要がある。

先に述べたとおり、現在、筆者は保育現場から離れ、市役所で養育者を支援する子育てカウンセラーという立場にある。市役所窓口や子育て支援課が運営するカウンセリング・ルームを訪れる養育者の悩みはさまざまである。保育現場に乳幼児を託している養育者の割合も多くなっており、そこには、日々、顔を合わせている保育者に対して集団としての限界を感じ、個別に悩みを打ち明けられない養育者の姿が見える。

こうした保育現場では受け止めきれない養育者の状況に対して、筆者がコミュニティのなかで実践する臨床心理学的な支援は、現時点では手探りの状態である。しかし、今後、臨床心理士がさまざまな職種や立場の人々と協働するチームの一員として活動していくは、今までの保育実践にはなかった行動であり、新たに作っていくシステム・オルガナイザーの機能であるといえる。そういう意味では、臨床心理学と保育学の融合は、保育現場がコミュニティ心理学の一端を担う新分野となり得る可能性を秘めているといえるであろう。

付記：本研究は、2005年度に徳島大学大学院人間・自然環境研究科（臨床心理学専攻）に提出した修士論文の前半部分を、加筆・訂正したものである。ご指導くださった山本真由美先生、質問紙調

査に協力していただいた各保育所幼稚園関係者の方々に心より感謝いたします。

引用・参考文献

- 青木久子・間藤侑・河邊貴子 子ども理解とカウンセリングマインド 2001 萌文書林
- ベンジャミン J. サドック パージニア A. サドック編 融道男・岩脇敦監訳 カブラン臨床精神医学ハンドブック第2版 1997 メディカル・サイエンス・インターナショナル
- DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 2002 医学書院
- 浜谷直人 保育を支援する発達臨床コンサルテーション 2002 ミネルヴァ書房
- 東山紘久・東山弘子 子育て 母親ノート法のすすめ 1992 創元社
- 平井信義 子ども中心保育のすべて 1993 フレーベル館
- 河合隼雄 心理療法序説 1992 岩波書店
- 河合隼雄 カウンセリングの実際問題 1970 誠信書房
- 河合隼雄・小平金次郎・滝口俊子 困ったときの子育て相談室 2003 創元社
- 小坂守孝 電子メールによる心理相談の試み 第22回コミュニティ心理学シンポジウム発表資料
1997 http://www1.mhlw.go.jp/toukei-i/rikon_8/repo5.html 2005. 10. 29
- 倉橋惣三 倉橋惣三全集 1936 フレーベル館
- 文部省 保育技術専門講座資料 1993 <http://www.mext.go.jp/> 2004. 8. 20
- 文部省 幼児教育の振興に関する調査研究協力者会合間報告 2000 <http://www.mext.go.jp/>
2004. 8. 20
- 文科省 初等中等教育局幼児教育課第13回中教審初等中等教育分科会幼児教育部会 2004
<http://www.mext.go.jp/> 2004. 8. 20
- 妙木浩之編 ウィニコットの世界 現代のエスプリ別冊 2004 至文堂
- 森上史朗 子どもに生きた人・倉橋惣三 1994 マルユー書籍販売会社
- 村山正治編 フォーカシング 現代のエスプリ 1999 至文堂
- 中村雄二郎 臨床の知とは何か 1992 岩波新書
- 大場幸夫 「保育臨床」の成立と課題 1989 日本教育心理学会 第31回大会論文集
- 大場幸夫 こどもの傍らに在ることの意味 保育臨床論考 2007 萌木書林
- 岡田正章・千葉喜代子他編 1997 現代保育用語辞典 フレーベル館
- 大日向雅美 子育てと出会うとき 1999 日本放送出版協会
- 大塚義孝他監修 金沢吉展編 臨床心理学コミュニティ援助論 2004 誠信書房
- 佐野勝徳・新開英二 見直そう子育てたて直そう生活リズム 2003 エイデル研究所
- 柴崎正行 日本保育学会会報第132号 2005
- 柴崎正行・田代和美 カウンセリングマインドの探求 2001 フレーベル館
- S. J. レポーレ, J. M. スミス編 余真語夫・佐藤健二監訳 筆記療法 2004 北大路書房
- 竹内健児 スクールカウンセラーが答える教師の悩み相談室 2000 ミネルヴァ書房
- 津守真 子ども学のはじまり 1979 フレーベル館
- 氏原寛・東山紘久編著 幼児保育とカウンセリング・マインド 1995 ミネルヴァ書房
- 山本和郎 コミュニティ心理学 地域臨床の理論と実践 1986 東京大学出版会

付録 質問紙

- 貴施設に当てはまるところを○で囲んでください。
私立幼稚園 国公立幼稚園 私立保育園（所）国公立保育園（所）
- ご記入下さった方は？
園（所）長 主任クラス（フリー） 主任クラス（担任あり）
担任クラスを持っている方 事務職の方 その他（ ）
- 性別は？ 男性 女性

当てはまる番号を○で囲んでください。

- 1 日頃、保育をされる上で、対応の難しいお子さんの保育（教育）や保護者の対応で困る場面が増えていると言われていますが、あなたの園（所）ではいかがですか？
 - ① かなり増えていると思う
 - ② やや増えていると思う
 - ③ どちらともいえない
 - ④ あまり増えてはいない
 - ⑤ ぜんぜん増えていない
- 2 質問1のような問題解消のために、あなたの園（所）では、何らかの対策をとっておられますか？
 - ① 対策をとっている
 - ② 対策はとっていない
 - ③ とくに必要はない
- 3 質問2で、①対策をとっていると答えられた方にお聞きします。
それはどんな対策でしょうか？いくつでも当てはまるものに○をつけてください。
 - ① 施設内で定期的な相談システムを完備している（週 回・月 回）
 - ② 施設内でその都度、不定期的な相談システムを取り入れている
 - ③ 施設内で事例検討会を実施している（定期的・不定期）
 - ④ 保護者への啓発活動として講演会を実施している（定期的・不定期）
 - ⑤ 職員にカウンセリング的な研修を実施している
 - ⑥ その時々で施設外の児童相談所などを利用している
 - ⑦ 外部から発達相談などの巡回相談事業を頼んでいる
 - ⑧ 外部から専門家を呼んで子育て相談事業をしている
 - ⑨ 臨床心理学的なカウンセリング事業をしている
 - ⑩ その他
- 4 質問3に回答くださった園（所）の事業内容について具体的にお教えてください。
- 5 質問3でカウンセリング的な事業をしているとお答えになった方にお聞きします。
それはどのような問題を対象にしておられますか？

